

しゃりん

27

2012/6



大阪教区での春休み☆
福島の子どもたちホームステイ

同朋会運動50年特別講座

同朋会運動50年 特別講座レポート

大阪教区教化委員会では、同朋会運動発足50年の節目に、その願いを確認し、51年目へのあゆみの一助となるよう、5回にわたり特別講座を開催しました。そこで今回は、それぞれの講座に参加した「しゅらりん」編集委員が講師の話から受け止めたことをレポートします。

特別講座開講の願い

「研修・講座」部幹事 稲垣洋信

研修・講座部では、2011年に厳修された宗祖親鸞聖人750回御遠忌が円成したことを受けて、2012年の課題として宗祖親鸞聖人700回忌を機に発足され、展開された同朋会運動について再確認する場が必要であると話し合い、同朋会運動50年特別講座を開催する運びとなりました。

若い世代の中では同朋会運動につ

いてぼんやりとしたイメージはあるが、どのような願いをもって信仰運動が始まったのか、そして具体的にどう展開されたのかはつきりしないといった現状が課題です。

また、当時を知っておられる方につきましては50年間の歩みを再確認していただき、さらなる同朋会運動（信仰生活）を実践していただくとともに、後を歩む世代へ篤い信仰運動を伝えていただけるように願います。

そして、特別講座を通して一人ひとりが自身の課題とし、同朋会運動を始め、継続していく中で、婦人会・青年会・子ども会へと御同朋・御同行の輪が広がっていくことを願いと

しています。

講座については、同朋会運動が発足されてからの歩みの中で、幅広い運動展開の数ある願い・課題・実践の中から「学ぶ姿勢」「仏教者の課題」「運動の歴史」「実践運動の実情」「現代の課題」というテーマをもって5回連続の講座を開催させていただきました。

第1回

- 開催日 2012年2月2日（木）
- 講師 五辻信行 大阪教務所長
- 講 題 同朋会運動に学ぶ姿勢
―教団問題と宗憲改正が意味するもの―

同朋会運動の根本

同朋会運動50年の特別講座ということで大変期待して参加した。

前から同朋会運動ということとはよく聞かし、その願いとするとところも習った覚えはあるけれど、その実際となると一体どんなものかよくわからない。また、運動という名はつい



ているけれど、それが具体的に自分のところで行われているのかということがピンとこないもので、それがハッキリすればとの思いで参加した。

開講に先立ち、「研修・講座」部幹事の稲垣洋信さんからも同様の願いが語られ、いよいよその思いを強くした。

五辻氏のお話は、氏自身が宗務役員として長年に渡って本山に勤務されたこともあり、本山を舞台とする諸問題と同朋会運動の関係が中心であった。約言すれば、親鸞の精神に立ち返って改めることは改めようと

宗祖親鸞聖人を学ぶ覚悟

いう同朋会運動に対して、大谷派が持っていた体質が抵抗し、それが教団問題という形をとって表れ、宗憲改正という形でその決着がついたということである。しかし、この構造は教団だからではなく、教区や組、寺院、また、個人のレベルにおいて存在する。同朋会運動をするという

ことは、それと真向かいになっていくこと、私の教団問題を課題にする時代が来ているというものだった。

1回目ということもあり、概略的なお話だったが、それぞれの立場において、親鸞の精神に立ち返って己をチェックせよということが同朋会運動の運動となる根であり、また、困難などところでもありと改めて確認した。

(久世見証)

第2回

●開催日 2012年2月9日(木)

●講師 藤井慈等 氏

●講 題 『水平社宣言』から問われる仏教者の課題―部落差別事件を起点として―

「マイホームはお寺から出て行け」そんな言葉が同朋会運動の頃にはありましたよと開口一番に語りだされた。

その歴史的背景として、難波別院差別事件を起源として、数回に渡る糾弾会で、米田富さんは「差別したことが悪い、申しわけないとか何とかね、我々に謝るように言うておられますけどね。私は皆さん方、本願寺の僧侶としてね、そういうことはご開山に申し訳なかったという気持ちはないんですか」と語られた。

同朋会運動が始まるまだ6年前「宗門各位に告ぐ」と発せられた、「宗門白書」(宮谷内局)の「宗門人は七百年間、宗祖聖人の遺徳の上に安逸をむさぼって来た」という言葉が呼応する。1961年に宗祖700回御遠忌がある。その前後に同朋会運動が始まって行く。親鸞の上に胡坐をかいていた我々の姿勢が問われ、ご開山に申しわけないという言葉が響いていたが、「今回の750回御遠忌では、そういうことは無かったですよね」とサラリと語られ



た藤井先生の言葉に思わずドキッとした。図星である。

750回御遠忌を迎えるというところが、私にとってどういう意味があるのかさえ問わなかったのではない。現実の私たちの日常に武内了温師らの背景をもった解放の運動があるだろうか。何かそのようなポーズをとった上っ面が苦笑いする。

部落差別事件を起点としての藤井先生の講義であったが、そこには親鸞聖人を宗祖として学べているのか。首の飛ぶような念仏という言葉に代表されるように、宗祖親鸞聖人の歩んだ道を歩んでゆく覚悟がある

のかと問われたような感じがする。藤井先生は水平社宣言の「人間を勸(いたわ)るかの如き運動は」の「勸」は「かすめとる」という意味であると言われた。それは何か宗門が担ってきた解放の運動に対して斜に構えている自分自身の姿を言い当てられているようであった。

50年前に始まった同朋会運動が、単なる昔の話として終わってしまえば、私たちの寺が寺として成就しないような気がする。まさにマイホームとなってしまう寺をもう一度、今覚悟をもって宗祖の御遠忌を機に見つめ直さなければならぬ。

(廣瀬 俊)

第3回

●開催日 2012年2月16日(木)

●講師 木越 樹 氏

●講 題 同朋会運動の源流をたずねて―運動の歴史をつくった人びと―

同朋会運動の精神を伝える

同朋会を背負った人たちとは、また背負っていくとはどういうこと

か、ということについて講座が進められた。

教区や組で、現在の同朋会運動にかかわる機会があっても、歴史や経緯を学ぶことがほとんどなかった私には、本講座は良い啓発となった。

講座で、親鸞聖人が打ち破ったはずの伝統教学や封建教学を、私たちの教団も長い時間の経過の中で同じ過ちを犯し、立ち上がろうとする人たちを眠らせてきた、という話を聞き、私たちの教団がいつしか伝統教学・封建教学になってしまっていた一面があつたことを考えると複雑な思いがする。

「親鸞の精神を回復するため」立ち上がった大正以降の水平社の運動家や、病や差別で苦しむ人たちの声に気づかされなければ、今日の私たちはなかったかも知れない。

木越氏は、「運動とはムーヴメント、仏法に出会うと体が動くのである。同朋会運動とはそういう流れを一人ひとりが背負う、一人ひとりの仕事、一人ひとりの運動である」と語られた。私たちが深く受け止めていくべき重い言葉に思えた。

一人ひとりが個の自覚に立ち返って、親鸞聖人の願いを伝えようと始

まった同朋会運動が、先人方のご苦労によって発展し、50年の歳月を経て今、私たちにまで伝えられてきた成果には本当に頭が下がる。

もともと、一人ひとりとしては純粹にその願いに立って真摯に取り組んできた運動であつたはずなのに、組織の形をとると、各寺院・教区・教団の人集めや宣伝として利用してしまつた面もあつたのではないかと思う。講座から、同朋会運動を「背負う」ということは、命がけの活動であつた時代があつたことを学んだ。浮生きようしゅうの交衆きようしゅうを絶つて仮名けみょうの修学を



離れ聖人の生き方に学び、事じ上じょう磨ま練れんによって原点である個の自覚道に立つという、ここまでの運動に育てあげてこられた前賢の精神、ここを学び取って伝えていく責務が私たちにはある。

これまで、親鸞聖人の精神を伝え、気づかせてくれたのは私たち組織内部の者ではなく、実に苦しみから立ち上がろうとする外部の人たちに拠るところが大きかった。また、ご門徒方のご助力がなければ、やはり同朋会運動は成り立たなかつたことと思う。

私たちが自ら推知できるほど慧敏なら、今後も同朋会運動は先師のご苦勞に報いていくことができるだろうが、たとえそこまでの明察がなくても、そうした苦惱の中にある方たちに耳を傾け学ぶ姿勢を忘れなければ、これからも同朋会運動は聖人の願いに応えていける運動であり続けることができると思う。(大戸俊彦)

第4回

●開催日 2012年2月24日(金)
●講師 亀井 鑛 氏

●講 題 同朋会運動の原風景―同朋のめざめ(初期仏教青壮年の願いに身をおいて)―

教えに帰る

亀井鑛氏は今回のシリーズの講師の中で唯一のご門徒である。「5回の講座の中で在家の者がたった一人というのはさみしい、せめて半分くらいは門徒からでなくてはいいかんのじゃないかなと思う」ということを亀井氏もおっしゃっていたが、このこと一つを見ても同朋会運動の現状を表しているともいえる。同朋会運動は「家の宗教から個の宗教へ」という言葉のもと、個々の人間が親鸞聖人の教えに帰るということを掲げたと聞いている。私は今まで推進員養成講座にかかわってきた中で、ともすれば運営や組織作りばかりを考え最も肝心の「教えに帰る」ということはどれほど注力していただろうか、本当に御同朋・御同行といえる人を生み出してきたのだろうか、という思いが重くのしかかってくる。問われているのは他の何者でもない、私自身なのだ。真宗と出会い、



親鸞聖人の教えに触れたのに、そこに喜びも感動も見いだせない自分がある。「教えに帰る」ということは自分自身が問われている、今のおのれの在り方を明らかにせよということではないだろうか。

今回の講義を受ける中で、寺に身をおくということ、僧侶として生きるということを問い直された思いがした。

亀井氏は最後に「私は若いころからお寺が嫌いで、念仏も口から出なかった。だけど今こうして同朋会を

やっておつて門徒のみなさんたちが目を輝かせて仏法を領いてくださる。その皆さんの姿を見ると、ああ、お寺の住職に生まれてよかった」との珉光院前住職のことばを紹介された。

そして氏は「こんなご住職に出遇わせていただけて真宗門徒に生まれてよかったなあ」という思いがしたと語られた。私はこれらの言葉に最後に一筋の光明を見た思いがした。

今はまだできない、しかし道は必ずあるのだと。(北川浩三)

第5回

●開催日 2012年3月1日(木)

●講師 蓑輪秀邦 氏

●講題 親鸞教学の現代性―現代社会の問題を接点として―

学ぶ姿勢

講義は、今回のテーマである「親鸞教学の現代性」を考えるための原点として、金子大栄師の追放事件を中心に進んだ。

これは金子師のそれまでの講義の

内容(「浄土の観念」が、異安心(「真宗の教義に反する考え方」)だとされた事件で、このことによつて師は1928(昭和3)年、大谷大学を追放され、翌年には大谷派の僧籍から脱退するというものであった。

また翌年には曾我量深師も同様の問題で大谷大学を辞任された。

私が勉強なのかもしれないが、このような問題があったことは薄ぼんやりとは知っていたが、はじめて詳しくその内容を教えていただいた。この問題はもつとひろく学ぶべきことだと感じた。

この「浄土の観念」ということについて、蓑輪氏からは詳細に講義をしていた。詳しく述べる紙幅はないが、この「観念としての浄土」という概念を中心として、この後の「真宗教学」は深められていったといつていいだろう。その意味でも、この「金子大栄師追放事件」とその後の顛末は、重要な意味を持つているのではないだろうか。

真宗学とは、「宗祖の著述を研究する(「解学」)ものではなく、「宗祖の学び方そのものを学ぶ(「行学」)ことである。そしてそのことを通じて自分の生き方を見つめ直していく、



あるいは生きていく力を与えていただけののが、本当の真宗の学びであると蓑輪氏はおっしゃられた。

私たちはともすれば難しいモノをがんばって勉強すれば、なにか自分が賢くなったような気がして、そこで満足してしまいがちである。そこに留まっていけないのだと、今回講義を聴かせていただいた改めて思ったことである。

金子師の事件から教えられて、そんな自身の学びの方向性まで問われた講義であった。(澤田 見)

大阪教区での春休み☆

福島の子どもたちホームステイ

大阪教区では、さる3月26日から30日までの5日間、福島の子どもたちとそこへ家族のホームステイを行いました。

初日、福島から13家族、41人がバスに乗って大阪・難波別院へ到着。夜遅くの到着で大人は少し疲れ気味でしたが、子どもたちは「ブットンくん」(大阪教区キャラクター)の出迎えに大はしゃぎでした。休む間もなくそれぞれ、受け入れ先の寺院へ移動。3泊4日をホームステイ先の寺院で過ごしました。

今回は「しゅらりん」編集委員がいくつかのホームステイ先にお邪魔し、子どもたちの様子を取材してきました。

18組・善良寺

八尾市の善良寺さんでは一大家族、子ども3人とお母さんを受け入れられました。

取材のため夕方の約束の時間に何うと、バーベキューの真っ最中。とはいえ3月下旬では日が落ちればま

だまだ寒いので、食べる人はリビングに。焼く係の副住職さんがガラス越しに庭で一人奮闘していました。福島から来た子どもたちは善良寺さんのお孫さんと一緒に今日は思いっきり久宝寺の公園で遊んだそうで、とってもお腹が減っているみたい。パクパク、モリモリ、元気に頬張ります。そして勧められるままに私もおよばれしながら、お母さんからい

ろいろいろとお話を聞かせていただきました。

中でも印象に残ったのは、子どもたちを遊ばせるのにすぐく気を遣っておられることです。「夏までは一切外で遊ばせなかつたんですよ」という言葉から始まった様々な事例。除染作業が済んだ

ところもあればまだなところもある中で、子どもたちが走っていく先を見て、そこは大丈夫だろうかと常に心配になるそうです。親の意識も人それぞれで、放射能に対し気にする

のを止めてしまったかのような人、反対にとっても頑なな人。そういう人たちに挟まれると、親同士のお付き合いにもストレスを感じてしまうとか……。週末に子どもたちを表で思



いっきり遊ばせてあげようと遠出をしてみたら、そこがかえって放射線が高かった！なんてこともあったそうです。

どれも今までの生活では感じる必要のなかったストレスです。平凡な日常が壊されてしまったのですね。

正直、小さな子どもたちが大阪まで12時間もバスに乗って来るのは大変でしょうし、わざわざ大阪くんだりまで……と思われているのではないだろうかと思っていました。しかしお話を聞かせていただくと、ここなら本当になんの心配もせず遊ばせることができる。ただそのためだけに親御さんは精一杯のことをされるのだなあと感じ入った次第です。

さて、こちらのご家族で残念だったのは、一番上の女の子が来た日にインフルエンザを発症してしまったことでしょう。お姉ちゃんの看病のため、予定していた計画を縮小せざるをえなくなりました。

そのことについてご住職からご意見がありました。こうした場合の対応についてです。マニュアルが欲しいということではないのだが、当事者の家族は不安だろうし、ホスト側も全力を尽くすとしても戸惑いはあ



る。双方の心的負担を軽くするためにも、様々なケースを予め考えておけるようにしていただきたいのとことです。確かにおっしゃる通りです。今回の企画は、まず私たちにできることをやってみようという願いから起こったもので、十分な準備の末とは言い難かったかと思います。しかしながら今回の試みは単発に終わらせることなく、継続事業にするとすることが決まっています。全体をコーディネートしたスタッフ、またホストとなった寺院、そして参加し

てくださったご家族の意見をしっかりと受け止めることによって、きつと今後に反映されることでしょう。

私がお会いしたご家族は昨年に北海道教区が行った同様の企画にも参加されていたそうです。教団の行うこうした事業にまた参加したいと思っていただけたことをとても嬉しく思います。そうした

期待を裏切らないためにも、教団内の連携、スキルの蓄積が必要です。

また協力度体制においても、寺院にとどまらずご門徒のみなさまにまで輪が広がっていければ素晴らしいことかと思えます。そうした取り組みをした寺院もあるように聞かれています。御同朋の精神が社会の中で実った姿ではないでしょうか。

最後に折り紙が得意な末っ子のレイちゃん。取材にきただけの私に、ちゃんと色まで合わせて作ってくれた折り紙のコマ、ありがとうね。

(平野圭晋)



11組・圓福寺

さる3月28日、茨木市の圓福寺さんへホームステイ中の家族に会いに行ってきました。ホームステイしているのは、9歳と6歳の女の子とそ



のお祖父さん、お祖母さんです。お寺で住職さんに子ども達の様子を聞くと「うちの子どもたちとすぐ仲良くなつて」と。初日から打ち解けて一緒に部屋で寝たり、上の子がお姉ちゃんの持つてきた宿題をみてあげ

たり、子どもが4人に増えたみたいだとおっしゃっていました。

子どもたちを呼んでもらい、どんなことをして遊んでいるのかと聞くと、「缶けり。おじちゃんも一緒にやろう」と。「一緒に遊んでやるか」と軽い気持ちで始めましたが、

最後の方は、必死に子どもを追いかけていました。結局最後まで負けっぱなしで、「鬼」役から抜け出せませんでした。子どもって「すごい」と思いました。始まるや否やパツと四方に散って姿を消します。隠れている間は作戦会議です。囀の子が鬼をおびき出し、隙を見て四方から缶をめがけて飛び出してくる。チームワークがよくて、捕まえてもすぐ逃げられます。

傍で見えていたお祖母さんは「子どもたちが楽しそうに遊んでいる姿を見て、自分たちも気分転換ができた」とおっしゃっていました。子どもが元氣よく遊ぶ姿は周りの人も元氣にするみたいです。

このホームステイを通して、少しでも放射能の影響のない地域で、心身ともに元氣を取り戻してもらえたらなあ、と思いました。真剣に、力いっぱい遊ぶ子どもたちの姿を見て、私も元氣をもらいました。ありがとう。

12組・勸正寺

守口市の勸正寺さんでのホームステイの様子を、後日長谷住職にうかがってまいりました。

9歳、8歳、6歳の3人のお子さんとお父さんがいらした勸正寺さんでは、ホームステイの間、鶴見緑地でのボール遊びにサーカス、大阪城にお好み焼き、天王寺動物園に新世の串カツと、盛り沢山のコースで大阪を満喫された様子です。残念ながら通天閣だけは、待ち時間がた

くさんあつて登れなかったそう。これは次回のお楽しみにとっておきたいとおっしゃっていました。

子どもたちが自由に外で遊べない現地での状況の中、芝生に寝転がらせてあげたい、自由に外を走り回らせてあげたいとの思いが強かったとのことでした。きれいな花が咲いているところで、いちいち子どもたちがお父さんに、「このお花触っていい?」と尋ねたり、雨が降ってきたら濡れないように気をつかう様子を見て、放射能が子どもたちの日常生活に与えている悪影響を感じたとおっしゃっていました。またお父さんのお話として、自分たちは家もあつてなかなか出て行くということは難しいけれど、子どもたちのことがやはり心配。このままここにいる本当に大丈夫なのか。確かな情報も入らないし、ほんとうに不安の中で生活することを余儀なくされている……というようなことを聞かれたそうです。

長谷住職は、被災者の方々にとっていちばん嫌なのはそんな現実を忘れ去られ、置き去りにされてしまうことではないか。どうしても距離が遠く離れているので我々は傍観者に



なってしまうが、そんな意味でも今回の企画は有意義なものであった。またそれぞれの家族が様々なお寺へホームステイしたことも、個々の家族とのつながりが深くなれてよかったのではないかとおっしゃっていました。ホームステイに来てくれた家族とは、これから少しずつ関係をとり続けていきたい。またしばらくして大阪へ遊びに来てくれたらと思われているそうです。

教区としては初めての試みでした

が、ホームステイに来られた子どもたちはもちろん、受け入れる側の私たちにも得ることは大きかったのだなど、今回長谷住職の話をお聞きして感じました。単発で終わるのではなく、継続的に続けていき、もっとたくさんのお寺が子どもたちを受け入れるようになればいいなと個人的には思っています。

(澤田 見)

今後の取り組みに向けて



↑ 保育園に設置された放射能線量計

大阪教区「原発に依存しない社会の実現を目指す委員会」では、被災地の実状をふまえ、今後どのように活動していくかを考えるために、さる5月9日から11日にかけて、福島県下の大谷派寺院を訪問し、住職や「家族」を中心に意見の聞き取りを行った。

訪問先の一つである仙台教区中組眞行寺では、この春休みのホームス

テイに参加した父母らも出席し、「保養が、子どもだけでなく親の支えにもなる」、「大阪で保養ができたことは本当にありがたいことで、たくさんの人とのつながりを実感しました」と、大阪教区の取り組みへの感想を語った。

今春に実施した「大阪教区での春休み☆福島の子どものためのホームステイ受け入れ計画」への様々な意見や要望が出され、今後の活動に向け

「門徒女性と坊守のつづい」レポート

2月27日、教化センター研修室にて、「門徒女性と坊守の集い」が開催され、「いのち輝け―浄土を願って生きる」と題して、大谷大学教授の一樂真氏が講演された。

講義の内容を要約してご紹介いたします。

現代社会において私たちは、さまざまな不安や苦悩の中に生きていく。そして、人が苦しみもがき不安を抱えながら、幸せを求め極楽浄土に生まれたいと願うのは、はるか昔



から変わらないことであろう。

『観無量寿経』の序文で語られる説話「王舎城の悲劇」。古代インド・マガタ国の都、王舎城の王室を舞台に、皇太子阿闍世に幽閉され苦悩する王妃韋提希が釈尊に会い、どのように救われていくか、その機縁が語られているが、それは単に遠い国の昔話ではなく、私たちが生きる現代社会においても、縁次第で起こりうる問題なのである。

韋提希は、幽閉の身になってはじめて、愁憂し憔悴して、以前は自分を慰問してくれていた（＝来慰問我）釈尊に会えない悲しみから、真に仏に遇っていなかった自分に気づく。釈尊の姿を見るやいなや、自ら胸飾りを絶ち号泣したのであった（＝自絶瓔珞）。初めて自分を恥も外聞

もなくさらけ出したのである。そして、憂いや苦悩のないところを求めるのである（＝無憂悩処）。

それは、もつともつとと限りなく続く貪愛や瞋憎、分別によってますます闇に陥っている現代の人間の業そのままでの姿である。

しかし、釈尊は五体を地に投げて苦悩を訴える韋提希を前にしても、沈黙のまま何も答えず、見守るだけであった。

そんな苦悩の中で、韋提希はいろいろなものに支えられて生きる自分と、その業の深さに気づく。そして、どんなものをも支える大地のごとく、どんなものにも降る雨のごとく、どんなものをも照らす太陽のごとくの、摂取不捨の阿弥陀仏の浄土を願いながら生きることを樂（ねがう）のである（＝我今樂生 極樂世界 阿弥陀仏所）。

苦しく厳しい現実に向き合い、分別の闇から解放され、それぞれがそれぞれの人生の現場を生きる。日常生活の中に浄土の光が届いてくる。そこに救いがある。「王舎城の悲劇」が、浄土の機縁となり、広く浄土の門が開かれたのである。

山口県光市の母子殺害事件で死刑

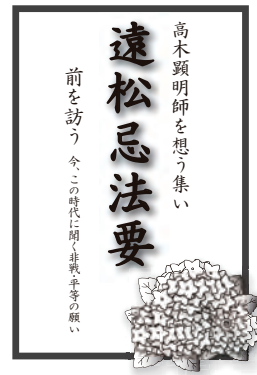
が確定した被告の心の闇を思うとき、その被告に対し、「死刑判決には満足だが、喜びはない。犯罪が起った時点で、犯罪者も被害者も敗者である。ただ、被告に自分がやったことを知ってほしい」と、おそらくは心をもぎ取られるような壮絶な悲しみと苦しみの渦の中から被害者の夫が語った言葉は、あまりにも重い。

「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもするべし」……我が身は縁次第でどんなことにもなっていく危うい人間である。そのことを思い知ったとき、そこから、生き方を導いてくれる仏の智慧、浄土の教えを求めていくのである。

浄土を願うということは、決して死後の問題ではなく、仲間とつながりながら今どういう生き方をするか、今何を中心に生きていくかということに深く関わっている。

3月間近とは思えない寒さの中、満場の会場は、参加女性の熱気に溢れていた。
（藤林容子）

教区教化事業のご案内



きたる6月16日(土)午後2時より、難波別院本堂にて、「遠松忌法要」が勤修されます。

遠松忌とは、明治の時代を生きた真宗大谷派の僧侶、高木顕明師の遺徳を偲ぶ法要です。師は部落解放に取り組み、新宮市における公娼設置に反対を唱え、当時の開戦に沸く日本にあつて、非戦平和を主張しました。

師は1910年(明治43)に天皇暗殺未遂事件、いわゆる「大逆事件」に連座したとされ、死刑の判決を受けます。判決の翌日には無期刑に減刑されるも、その3年後に秋田の監獄にて縊死されました。また、真宗大谷派は師が投獄されると住職差免及び擯斥(永久追放)の処分を下しました。

1996年、宗門は当時の教団が

国家に追隨して行つた師への処分と、85年の間放置してきた宗門の責任を慚愧し、師への処分を取り消し、師のご家族や門徒の方々へ謝罪を表明しました。

当法要は2000年より真宗大谷派(解放運動推進本部)主催、大阪教区ならびに難波別院が共催し、毎年浄泉寺(和歌山県新宮市)にて開催されてきました。これまでの取り組みの中で、高木師の業績を、遺志をより多くの方に知っていただき、現代に生きる私たちの生き方を見つめなおしてまいりたいとの願いから、浄泉寺、難波別院そして東本願寺(真宗本廟)と会場を変えて、開催していくこととなりました。

全推進員の集い

きたる6月10日(日)午後2時より、



難波別院にて「大阪教区全推進員の集い」を開催いたします。当日は「出会ひ 語らい 伝えよう」をテーマに、名古屋教区の亀井鑛氏、長浜教区の勝木依正氏からお話を聞きます。お二方とも推進員として活躍されてきた方です。今回の集いでは推進員の役割や、どのようにして同朋会運動を続けてきたかなどの経験談をはじめ、真宗の教えに遇つた感動を伝えていただきます。

さらに、話の後には、2人の講師と大阪教区推進員連絡協議会会長の細川克彦氏がパネルディスカッションを行い、推進員の抱える現状の課題について討論する予定です。朋友をお誘いあわせのうえ、ご参加ください。

人権学習公開講座

24年前、岡山県邑久町にある長島に念願の「橋」が架かりました。長くハンセン病隔離の島であつた長島は、いまや往来が自由です。しかし、誤つた法律の下で人間の尊厳を奪われ続けてきた人々の存在があることを忘れてはいけません。

この問題に対する無知・誤解から生じる「差別」、無関心が生み出す「疎外」は解消されていません。私たちは、直接・間接を問わず、これに何の問題意識も持たないということだけで、「差別」や「疎外」に手を貸すことになるのです。

本講座を手がかりに、人間回復への第一歩を踏み出しましょう。

- 日時 6月26日(火)午後6時〜
- 場所 難波別院教化センター研修室
- 講師 加藤 めぐみ 氏

(ハンセン病回復者支援センター「コーディネーター」)

手嶋 敬一 氏

(ハンセン病関西退所者原告団いちょうの会 副会長)

BEST SHOT

ホームステイでの子どもたちの笑顔



編集後記

◆東日本大震災から
1年経過しました。日
本中の人が、世界の多

くの人が「自分に何ができるか?」「現地に行けない身でも、何か手助けできることはないか?」と考えた1年だったでしょう◆生物学者の福岡伸一氏によると、細胞は分裂していくときにコミュニケーションを取り合うそうです。「君が脳になるなら私は皮膚になる」というように、相互関係の中で役割を決定していくということです。人も他者との関係の中でこそ、「自分」を定位していくものだと。自分を見つめるとき、一人よがりになつてはいけなさと◆同朋会運動51年目の今年、新たな歩みが始まるうとしています。また大阪教区は御遠忌を控えています。震災の支援活動もまだまだ続いています。それぞれに関して様々な行事、取り組みが開催されていきます◆ぜひ、できるかぎり参加して人と関わっていく中で(御同朋・御同行の中で)、自分を見つめ、「いのち」を輝かせていきたいものです。(N)

発行日:2012年6月1日

発行所:真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町4-1-11
TEL06-6251-4720

発行人:五辻信行

編集: 第4組 常樂寺・久世見証
第9組 淨圓寺・難波美千子
第10組 是三寺・北川浩三
第12組 清澤寺・澤田 見
第16組 即得寺・大戸俊彦
第17組 法観寺・廣瀬 俊
第25組 南林寺・藤林容子
第27組 願隨寺・平野圭晋
第27組 信證寺・吉内利彦

<http://www.icho.gr.jp/shararin/>